

韓国語を母語とする上級日本語学習者における 日本語漢字単語の視覚的認知

— 文先行呈示による語彙判断課題を用いた実験的検討 —

柳本大地・費 曉東¹・松見法男
(2016年10月6日受理)

Visual Recognition of Japanese Kanji-Words on Korean Students
Leaning Japanese in Advanced-level

— Using lexical decision task of words with pre-presentation of Japanese sentences —

Daichi Yanamoto, Xiao-dong Fei¹ and Norio Matsumi

Abstract: The purpose of this study is to investigate visual recognition of Japanese kanji-word processing on advanced-level Korean students learning Japanese. In the experiment, high-constraining of sentences were used as pre-presentation conditions, and orthographic and phonological similarities between the Korean and Japanese language were treated as independent variables, while the reaction times from the visual lexical decision task were assigned as the dependent variables. The result shows that the facilitation effect was only observed in the phonological similarities. Indicating that no facilitation effect in the orthographic similarities was found, in contrast to Yanamoto (2015) findings based on the context exclusion word recognition process of advanced-level Korean students learning Japanese. In a word recognition process of Korean students in sentence context, the effect of phonological similarities of the words was significant as well as the effect of context.

Key words: Japanese Kanji-words, Korean students, pre-presentation of sentences, orthographic and phonological similarities, high-constraining of sentences
キーワード：日本語漢字単語，韓国語学習者，文先行呈示，形態異同性と音韻類似性，高制約文

1. はじめに

韓国語を母語とする日本語学習者（以下、韓国語学習者）は、第二言語（second language：以下、L2）として習得した日本語をどのように意味処理しているのだろうか。また、単語単独の処理でみられる現象は、文脈情報の中で単語が処理される場合でも同様にみられるのであろうか。

韓国は、日本や中国と同じく漢字文化圏であり、韓国語では、中国語に由来する漢字を借用語として使用

している。そのため、韓国語と日本語（以下、韓日）には、同形語が多く存在し、2言語で音韻が類似した単語が多く見られる。例えば、日本語の「温度」は、韓国語では「온도 (on-do)」であり、音韻が類似している。海保（2002）は、漢字圏の日本語学習者の漢字の読みにおいて、母語の漢字の音がL2の漢字学習を促進する一方で、微妙な違いも弁別しなければならないことを指摘している。他方、韓国では近年、漢字の使用が減少し、表音文字であるハングルが書記体系として使用されており、母語において漢字語を音韻情報により意味処理している。よって、韓国語学習者は、必ずしも漢字圏の学習者とは言えない。そのような特

¹北京外国語大学北京日本学研究中心

徴を持つ韓国学習者が、日本語漢字単語を処理する際、独自の処理過程を有することが考えられる。

2. 先行研究の概観

2.1 単語単独の処理に関する先行研究

語認知 (word recognition) に関する研究は、母語における処理研究の流れから、L2の分野においては、主に表音文字であるアルファベットを書記体系に使用する印欧語族の2言語を対象とした研究が行われてきた (e.g., Potter, So, Von Eckardt, & Feldman, 1984; Kroll & Stewart, 1994)。これらの研究の流れから、近年、日本語教育分野では、母語の書記体系に漢字のみを使用する中国語を母語とする日本語学習者 (以下、中国人学習者) を対象とし、表意文字である日本語の漢字単語の処理について、検討が積み重ねられ、中国人学習者の日本語漢字単語の処理過程と心内辞書 (mental lexicon) 構造について、その様相が明らかにされつつある (e.g., 蔡・費・松見, 2011; 松見・費・蔡, 2012; 費・松見, 2012; 費, 2013)。

中国人学習者を対象とし、中日2言語の形態類似性と音韻類似性を要因として操作した研究により明らかになったことは、主に以下の内容である。

- 1) 中日2言語で形態類似性が高い単語は、2言語で形態表象を共有している。
- 2) 中日2言語の音韻表象は、分離・独立して形成されている。
- 3) 視覚呈示事態の処理において、2言語の音韻類似性が日本語単語の処理に促進効果を与える一方で、聴覚呈示事態の処理において、2言語の音韻類似性が日本語単語の処理に抑制効果を与える。
- 4) 心内辞書内で、2言語の形態情報と、音韻情報が相互的にかかわっている。
- 5) 習熟度や学習環境によって、処理の様相が異なる。

中国人学習者を対象とした研究に基づき、近年、母語の書記体系に表音文字を使用する韓国学習者を対象とした検討が行われている。松島 (2013) は、初級終了後の韓国学習者を対象とし、韓日2言語間の形態類似性と音韻類似性が、日本語漢字単語に及ぼす影響について、読み上げ課題を用いて検討を行った。その際、形態類似性と音韻類似性については、別々に操作された。実験の結果、形態類似性の効果がみられず、音韻類似性の促進効果がみられた。また、松島 (2014) は、韓日2言語の同根語 (cognate) と非同根語 (non-cognate) を材料要因とし、上級の韓国学習者の日本語漢字単語の処理過程を、視覚呈示の語彙判断課題と読み上げ課題を用いて検討した。その結果、語彙判

断課題と読み上げ課題を用いたそれぞれの実験において、同根語の促進効果がみられ、韓国学習者が目で見えた日本語漢字単語を処理する際、韓国語の音韻表象を経由することで、日本語漢字単語の処理が促進されることが示唆された。

柳本 (2015) は、韓国国内の上級学習者を対象とし、視覚呈示における日本語漢字単語の処理過程について、韓日2言語の形態異同性⁽¹⁾と音韻類似性を同時に操作した実験を行った。その結果、形態異同性の主効果が有意であり、形態同形による促進効果がみられた。また、音韻類似性の主効果が有意であり、音韻類似性の促進効果がみられた。これらの結果により、韓国国内の上級学習者が目で見えた日本語漢字単語を処理する際、韓国語の音韻表象を活性化することで、迅速に意味処理されること、形態同形の形態表象と、韓国語の音韻表象との連結が強いことが示唆されている。

2.2 文の先行呈示による先行研究

単語単独の処理でみられる影響は、文や文章の中で、単語を処理する際、同様の影響がみられるのであろうか。単語単独の処理の研究の流れから、文脈が単語の処理に及ぼす影響について考慮した語彙の処理の研究が現れてきた。それらの多くは、文の制約性 (文中のある単語が、文脈上どの程度規定 (制約) されるか) を操作して、単語単独呈示の処理過程と比較する形で検討が行われている。Van Hell (2005) は、オランダ語と英語のバイリンガルを対象とし、文の制約性の高低と同根語・非同根語を要因として操作し、ターゲット単語を空欄にした文を先行呈示し、文脈が活性化した状態での単語の処理について、語彙判断課題と口頭翻訳課題を用いて検討した。その結果、単語の単独呈示の処理でみられる同根語の促進効果が、制約性の低い文 (以下、低制約文とする) ではみられたが、制約性が高い文 (以下、高制約文) ではその効果が語彙判断課題ではみられず、口頭翻訳課題においても低減した。このことから、文脈が単語の意味処理に影響を及ぼすことが明らかになった。Schwartz & Kroll (2006) は、スペイン語と英語のバイリンガルを対象に、文の制約性の高低と同根語・非同根語を要因とした読み上げ課題を用いた検討を行い、低制約文では同根語が速く読まれ、同根語の促進効果がみられるのに対し、高制約文ではその効果がみられなかったことから、文の制約性が単語の処理に影響を及ぼすことを明らかにしている。

アルファベット文字をもつ印欧語族の2言語を取り上げた研究では文脈の影響がみられたが、中国人学習者の日本語漢字単語の処理ではどのような影響が

みられるのであろうか。これについては、蔡 (2009, 2011), 費・松見 (2013) が検討している。

蔡 (2009) は、上級の中国人学習者を対象とし、文の制約性が、日本語漢字単語の処理に及ぼす影響について、視覚呈示事態の読み上げ課題を用いて検討した。その結果、高制約文の方が、低制約文よりも、ターゲット単語が速く読まれ、文の制約性による促進効果がみられた。他方、文の制約性にかかわらず、形態類似性による促進効果がみられたことから、文情報を利用する場合にも、形態表象を共有する形態類似性の高い単語がより速く処理されることが示唆された。蔡 (2011) は、聴覚呈示事態の語彙判断課題により、文の制約性が単語の処理に及ぼす影響について検討した。その結果、文の制約性による促進効果がみられ、高制約文の方が、低制約文よりも後続に呈示される単語の処理が速かった。また、高制約文において、形態類似性による効果がみられなかったが、文の制約性にかかわらず、音韻類似性の抑制効果がみられた。これらの結果により、文が先行的に呈示された場合、ターゲット単語の意味表象と日本語の形態表象の両方が活性化されることが示唆された。

費・松見 (2013) は、中国人学習者の心内辞書における各表象間の連結関係を検討した。その際、実験結果を上級の中国人学習者を対象とし、形態類似性と音韻類似性を同時に操作して単語の単独呈示による聴覚的処理を検討した費・松見 (2012) の研究と比較した。実験の結果、高制約文においても、形態・音韻類似性の効果がみられたことから、文脈を伴う処理についても、母語からの影響を受けることが示唆された。すなわち、印欧語族の2言語の処理とは異なり、日本語漢字単語の処理過程では、母語と日本語の形態表象及び、音韻表象が相互的にかかわり、処理が行われることが明らかにされている。韓国人学習者を対象とし、文脈を考慮した研究は管見の限り見当たらない。韓国人学習者の心内辞書内での2言語間の表象の連結関係を明らかにする上で、単語単独の処理過程と、文情報が呈示された場合の処理を比べる必要があると考えられる。

3. 本研究の目的及び仮説

本研究では、韓国人学習者の日本語漢字単語の視覚的処理過程について、文先行呈示により検討する。実験は、漢字単語の形態異同性と音韻類似性を操作し、韓国国内で学習する上級学習者対象とし、実験的検討を行う。印欧語族の言語話者を対象とした Van Hell (2005) 及び Schwartz & Kroll (2006) でも、中国人

学習者を対象とした蔡 (2009, 2011) でも、高制約文において、単語単独の処理でみられる効果と異なることが理論的根拠となり、文の制約性が単語の処理に影響を及ぼすと結論づけている。また、低制約文では、ターゲット単語と異なる概念表象が活性化することにより、単語の属性以外の要因が影響を及ぼす可能性が考えられる。よって、本実験では、先行的に呈示する文は、高制約文とし、視覚呈示事態による語彙判断課題を採用する。

【仮説1】韓国国内の上級学習者を対象とし、単語の単独呈示事態による検討を行った柳本 (2015) では、形態同形の単語が形態異形の単語よりも速く意味処理された。本実験では、高制約文を先行呈示するため、文脈情報により、ターゲット単語が活性化することが考えられる。よって、本実験において、形態異同性による差がみられないであろう。

【仮説2】柳本 (2015) では、音韻類似性の促進効果がみられた。音韻が類似性する単語は、母語の音韻表象を活性化することで迅速に意味処理される。韓国人学習者の場合、母語において音韻情報から意味処理を行っているため、高制約文が呈示された後の処理においても音韻類似性の高い単語が低い単語よりも速く処理されるであろう。

【仮説3】形態異同性×音韻類似性の交互作用がみられるであろう。柳本 (2015) では、形態同形単語の形態表象と、母語の音韻表象の連結が強いことが示唆された。これに基づくならば、形態同形の単語において、音韻類似性の高い単語が低い単語よりも速く処理されるであろう。

4. 方法

4.1 実験参加者

韓国国内の大学または大学院で学習する上級日本語学習者16名 (女性9名, 男性7名) を対象とした。全員が日本語能力試験 N1 または旧日本語能力試験1級を取得していた。日本滞在歴は3ヶ月以下であり、平均日本語学習歴は5年4ヶ月であった。

4.2 実験計画

2×2の2要因計画を用いた。第1の要因はターゲット単語における、韓日2言語間の漢字単語の形態異同性であり、韓日の漢字単語が同形か異形かの2水準であった。第2の要因は、ターゲット単語における韓日2言語間の音韻類似性であり、韓日の漢字単語の音の類似性が高いか低いかの2水準であった。2つの要因ともに参加者内変数であった。

4.3 材料

実験で使用する材料は、すべての単語が旧日本語能力試験の2, 3, 4級のものであった。形態異同性については、韓日2言語で漢字単語の字体が同形のものを形態同形、韓日2言語で漢字単語の字体が異形のものを形態異形とした。音韻類似性については、松島 (2015) の資料²⁾を用い、音韻類似性が4.5以上のものを音韻類似性高とし、3.0以下のものを音韻類似性低とした。材料文とターゲット単語については、予備調査に基づき、選定された。予備調査は、本実験に参加しない上級の韓国人学習者15名に調査を依頼し、空欄のある材料文を呈示し、その空欄に当てはまる単語を記入するように教示された。15名中11名以上が同一の単語を選んだものを、ターゲット単語として選定した。

ターゲット単語については、形態異同性と音韻類似性の高低に基づき、「漢字単語の形態が同形で音韻類似性が高い単語」、「漢字語の形態が同形で音韻類似性が低い単語」、「漢字の形態が異形で音韻類似性が高い単語」、「漢字の形態が異形で音韻類似性が低い単語」の4条件について、それぞれ10個、計40個を選定した。選定された各条件の単語の出現頻度について、1要因分散分析を行った結果（本研究では、有意水準は5%とした）、主効果は有意ではなかった ($F(1, 9) = 1.03, p = .40, \eta^2 = .080$)。実験で使用した Yes 試行の材料文とターゲット単語の例を、表1に示す。また、No 試行として非単語とフィラー文が20個作成された。

表1 実験で使用された先行文とターゲット単語の例

先行呈示される文	単語
なくしたカギが見つかって () しました	安心
久しぶりに高校の友達に () をかけました	電話
これは一度食べてみる () があります	価値
忙しいのでまた次の () に会いましょう	機会

4.4 装置

本研究の実験プログラムは、SuperLab Pro (Cedrus 社製 Version4.0) を用いて作成された。実験には、パーソナルコンピュータ (SOTEC N15WMT02A) および周辺機器が用いられた。

4.5 手続き

実験は、個別実験により実施された。コンピュータ画面の中央に注視点が500ms呈示され、空白の後、コンピュータ画面に空欄のある1文が呈示される。実験参加者は、呈示された文を読み終わったら、キーを押すように教示される。実験参加者がキーを押すと、

文が消え、コンピュータ画面中央に2字漢字単語が呈示される。実験参加者は、呈示された単語が、日本語であるか否かをできるだけ速く正確に判断するように教示された。日本語であれば Yes キーを、日本語でなければ No キーを押すように求められた。単語の呈示時間は、最大5000msであり、参加者がキーを押さずに無反応だった場合、500msの空白を経て、次の文が呈示された。文と単語の呈示順序はランダムであり、単語が視覚呈示されてから実験参加者がキーを押すまでの時間が、反応時間としてコンピュータにより自動計測された。練習試行を経て、本試行が行われた。実験の流れを図1に示す。実験終了後、未知単語の確認のための翻訳課題と、母語の漢字知識を確認する課題、学習歴などを確認する調査が行われた。

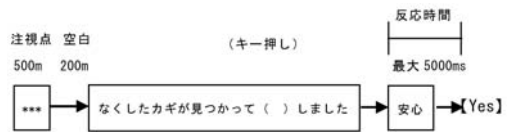


図1 実験における1試行の流れ

5. 結果

分析対象は Yes 試行の反応時間のみであった。実験参加者の無反応、誤反応、未知単語、韓国語で使用される漢字が未知であったものについては、分析対象から除外した。各参加者の平均正反応時間と標準偏差 (SD) を算出し、平均正反応時間 ± 2.5SD から逸脱したデータは外れ値として分析の対象から除外した (除外率は19.21%であった)。各条件の平均正反応時間と標準偏差を図2に示す。2 (形態異同性: 同, 異) × 2

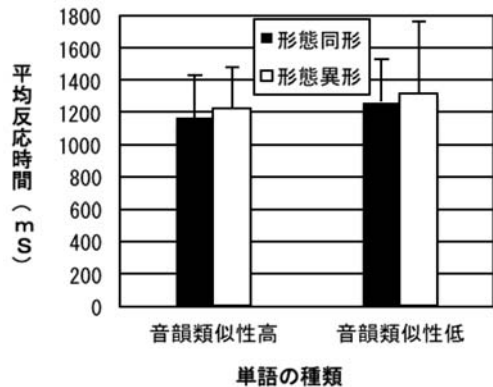


図2 形態異同性と音韻類似性による各条件の平均正反応時間及び標準偏差

(音韻類似性:高, 低)の2要因分散分析を行った結果, 形態異同性の主効果が有意ではなかった ($F(1, 15) = 1.89, p=.19, \eta^2=.006$)。音韻類似性の主効果が有意であり ($F(1, 15) = 4.92, p=.04, \eta^2=.021$)。形態異同性にかかわらず, 音韻類似性の高い単語は, 低い単語よりも反応時間が短かった。他方, 形態異同性×音韻類似性の交互作用が有意ではなかった ($F(1, 15) = 0.003, p=.96, \eta^2<.001$)。

各条件の誤答率(表2を参照)を角変換した値について2要因分散分析を行った結果, 形態異同性の主効果が有意ではなかった ($F(1, 15) = 0.003, p=.96, \eta^2<.001$)。音韻類似性の主効果が有意であり ($F(1, 15) = 7.65, p=.01, \eta^2=.073$)。音韻類似性の低い単語の方が, 高い単語よりも誤答率が高かった。形態異同性×音韻類似性の交互作用が有意ではなかった ($F(1, 15) = 0.69, p=.42, \eta^2=.012$)。各条件の平均正反応時間及び誤答率の結果により, 反応時間が長い条件で誤答率が低い, 逆に反応時間が短い条件で誤答率が高いというトレードオフ(trade-off)現象はみられなかった。よって, 本実験の反応時間には, 語彙判断課題に要する時間の相対的な長短が反映されていると考えられる。

表2 誤答率(%)及び標準偏差

形態同 音韻高	形態同 音韻低	形態異 音韻高	形態異 音韻低
6.85 (9.00)	10.23 (10.53)	4.61 (7.98)	12.69 (12.29)

6. 考察

本研究では, 韓国国内で学習する上級の韓国語学習者の視覚呈示事態における日本語漢字単語の処理過程を, 文先行呈示による語彙判断課題を用いて検討した。以下, 実験の結果と単語単独呈示による柳本(2015)の結果に基づき, 韓国語上級学習者の日本語漢字単語の処理過程について考察する。

形態異同性による主効果が有意ではなかったことから, 仮説1が支持された。この結果は, 単語単独の視覚的処理を検討した柳本(2015)と異なる。文が先行的に呈示される場合, 単語単独の処理のみで形態情報の影響が低減されることが示唆された。この結果は, 中国人学習者とは異なる。中国人学習者の場合は, 高制約文が先行呈示され, 文脈からターゲット単語の概念表象が活性化した場合においても, 形態類似性の促進効果がみられ, 2言語で形態表象が共有している形態類似性の高い単語がより速く意味処理できることが推察されている。韓国語学習者の場合, 単語単独の

視覚的処理では, 形態同形単語と母語の音韻表象の連結が強いことが示唆されているが, 文の先行呈示事態において, 文脈によりターゲット単語の概念表象と母語の音韻表象が活性化された状態で, 日本語単語の形態情報から意味処理されたことが推察される。すでに音韻表象が活性化しているため, 形態異同性による差がみられなかったことが考えられる。

次に, 音韻類似性についてである。音韻類似性の主効果が有意であり, 音韻類似性の促進効果がみられ, 仮説2が支持された。この結果は, 単語単独の視覚的処理を検討した柳本(2015)と同様の結果である。形態表象を先行的に制約文が呈示された場合も, 母語の音韻表象の活性化の影響を受けて意味処理され, 類似性の高い単語においては, 音韻が類似する母語の音韻表象を経由することにより, 迅速に意味処理されることが考えられる。中国人学習者を対象とし, 読み上げ課題を用いた蔡(2009)では, 文の制約性にかかわらず, 音韻類似性の効果がみられなかった。音声出力が求められる読み上げ課題と, 語彙判断課題では, 課題の性質が異なるため直接的な比較は難しいが, 中国人学習者は, 母語の形態表象の活性化の影響を強く受ける一方で, 韓国語学習者の場合, 母語の音韻表象の活性化の影響を強く受ける処理過程を有することが窺える。また, 本研究の結果が, 印欧語族の研究結果と異なる影響を示した点についても, 示唆に富む。Van Hell(2005)及び, Schwartz & Kroll(2006)では, 高制約文が先行呈示された時の語彙判断課題で, 同根語の効果がみられなかった。すなわち印欧語族の2言語を対象とした研究では, 文脈の制約性により, 語彙の影響がみられなくなることが明らかにされている。

しかし, 本研究及び, 蔡(2009)では, 高制約文が先行呈示された場合においても, 語彙の影響が部分的にみられたことから, 日本語漢字単語を文脈の中で処理する際, 印欧語族の2言語とは異なり, 語彙処理に母語が影響して意味処理されることが明らかになった。

他方, 形態異同性×音韻類似性の交互作用が有意ではなかったことから, 仮説3が支持されなかった。しかし, 記述統計範囲内ではあるが, 4条件の中で, 形態同形で音韻類似性の高い単語がもっとも速く意味処理されたことから, 柳本(2015)で示唆された形態同形の単語と, 母語の音韻表象の連結の強さが, より速く意味処理する要因となることが窺える。

7. おわりに

韓国国内の上級学習者が日本語漢字単語を処理する際, 文が先行的に呈示された場合においても, 韓国語

の音韻表象の活性化することによって、意味処理を行うことが明らかになった。

本実験の結果から、韓国人学習者の語彙学習において提言を試みる。韓国人学習者が目で見た単語を意味処理する際、それが単語のみの処理であっても、文脈を伴う処理であっても、母語の音韻表象の活性化が処理に影響を与える。よって、読解学習など、文あるいは文章の意味理解においても、それらの処理に影響を及ぼすことが考えられる。音韻類似性の高い単語においては、促進の影響を与える一方で、音韻類似性の低い単語においては、一つ一つの単語の処理に時間がかかることが考えられる。特に音韻類似性の低い単語を目で見て、それらを母語に翻訳する、あるいは発音するなどして、形態表象と、2言語の音韻表象の連結を強める訓練が必要であろう。

本研究では、上級の韓国人学習者の日本語漢字単語の視覚的処理について、文の先行呈示による検討を行った。単語単独呈示事態の処理と比較することにより、心内辞書内における韓日2言語の表象間の関係について検討した。今後、さらに韓国人学習者の心内辞書構造を検討するために、呈示モダリティの異なる、聴覚呈示事態における日本語漢字単語の処理に、文脈情報が及ぼす影響を単語単独の呈示事態と比較検討する必要がある。

【注】

- (1) 本研究における形態異同性は、韓日2言語間で使用される漢字の字形が同じものを「形態同形」、字形が異なるものを「形態異形」として定義する。この定義は、中国人学習者を対象とした研究における「形態類似性」とは異なる定義である。
- (2) 松島 (2015) は、国際交流基金 (2002) の日本語能力試験1級、2級語彙表にある2級以下の単語から、日本語2字漢字単語の形態類似性と音韻類似性について、日本語学習経験のない韓国語母語話者と、日本留学中の韓国人上級学習者を対象とし、類似度を7段階評定させている。本研究では、この資料における日本語学習経験のない韓国語母語話者の評定を基準に、音韻類似性の高低を分類し、材料となる漢字単語を選定した。

【引用文献】

天野成昭・近藤公久 (2000). 『NTT データベースシリーズ 日本語の語彙特性 第2期』三省堂
 蔡 鳳香 (2009). 「中国人上級日本語学習者の日本語漢

字単語の処理過程—文の先行呈示事態における検討一」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』58, 205-212.

蔡 鳳香 (2011). 「文の先行呈示事態における日本語漢字単語の処理過程—聴覚呈示を中心に—」『第二言語としての日本語の習得研究』14, 38-59.

蔡 鳳香・費 暁東・松見法男 (2011). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—語彙判断課題と読み上げ課題を用いた検討—」『広島大学日本語教育研究』21, 55-62.

費 暁東 (2013). 「日本留学中の中国語人上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知—中日2言語間の形態・音韻類似性を操作した実験的検討—」『留学生教育』18, 35-43.

費 暁東・松見法男 (2012). 「中国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の聴覚的認知—中日2言語間の形態・音韻類似性による影響—」『教育学研究ジャーナル』11, 1-9.

費 暁東・松見法男 (2013). 中国語を母語とする上級日本語学習者の日本語文の聴解における日本語漢字単語の処理過程—文の制約性及び単語の形態・音韻類似性を操作した実験的検討—」『第二言語としての日本語の習得研究』16, 107-124.

海保博之 (2002). 「漢字の指導」海保博之・柏崎秀子 (編著)『日本語教育のための心理学』第7章 (pp.111-121), 新曜社

国際交流基金 (2002). 『日本語能力試験 出題基準 改訂版』凡人社

Kroll, J. F., & Stewart, E. (1994). Category interference in translation and picture naming: Evidence for asymmetric connections between bilingual memory representations. *Journal of Memory and Language*, 33, 149-174.

松見法男・費 暁東・蔡 鳳香 (2012). 「日本語漢字単語の処理過程—中国語を母語とする中級日本語学習者を対象とした実験的検討—」畑佐一味・畑佐由紀子・百濟正和・清水崇文 (編著)『第二言語習得研究と言語教育』第1部 論文2 (pp.43-67), くろしお出版

松島弘枝 (2013). 「漢字と語彙の習熟度が異なる韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程—2 字単語の形態・音韻類似性を操作した読み上げ課題による検討—」『広島大学大学院教育学研究科紀要 第二部 (文化教育開発関連領域)』62, 281-290.

松島弘枝 (2014). 「韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の視覚的認知—韓日 2 言語間の同根語と非同根語の処理過程—」『留学生教育』19, 23-32.

松島弘枝 (2015). 「日本語 2 字漢字単語における韓国

- 語漢字との形態・音韻類似性調査」『広島大学日本語教育研究』25, 67-73.
- Potter, M. C., So, K. -F., Von Eckardt, B., & Feldman, L. B. (1984). Lexical and conceptual representation in beginning and proficient bilinguals. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 23, 23-38.
- Schwartz, A. I., & Kroll, J. F. (2006). Bilingual lexical activation in sentence context. *Journal of Memory and Language*, 55, 197-212
- 柳本大地 (2015). 「韓国語を母語とする上級日本語学習者における日本語漢字単語の視覚的認知—韓日2言語間の形態異同性と音韻類似性を操作した実験的検討—」『第20回 JAISE 研究大会プログラム・要旨集』, 25-26.
- Van Hell, J. G. (2005). The influence of sentence context constraint on cognate effects in lexical decision and translation. In ISB4: J. Cohen, K. T. McAlister, K. Rolstad, & J. MacSwan (Eds.), *Proceedings of the 4th International Symposium on Bilingualism* (pp.2297-2309). Somerville, MA: Cascadilla Press.